その暗い満月の下、舞い散る桜の中

露草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その暗い満月の下、舞い散る桜の中

【Ｎコード】
Ｎ３４７８Ｒ

【作者名】
露草

【あらすじ】
春――
少女は彼女と出会った。
彼女は誰よりも純粋で、可憐で、廉潔で、
醜い私はそんな彼女に惹かれてしまった……
夏――

妹たちの文化祭にやってきた川峰梗二と蔵森祐紀。
そんな彼らの前で事故が起きる。
偶然は必然か、女子校というアウェーで二人の捜査が始まる。

※この小説は私が現在進行中の企画のプロモーション小説になります。

Ｏｕｖｅｒｔｕｒｅ　舞い散る桜の中

□Ｏｕｖｅｒｔｕｒｅ　舞い散る桜の中

爽やかに澄んだ蒼い空から、桃色の雪片が舞い降りてくる。

ただ、ひらひらと。

石畳の敷き詰められた並木道。その両側に等間隔で並ぶ桜の木は、今がちょうど見頃だった。だが観光名所にでもなりそうなほど見事な桜の並木道には、異様なほど人気がない。ただ一人を除いて、周囲には誰の姿もなかった。

ゆるやかに舞い散る桜の中、一人の少女が足早に歩いていた。周りの桜には目もくれず彼女はただ歩き続ける。ふと、少女が顔を上げた。

ショートカットの髪がそよ風に揺れる。その下にあるのはまだ幼い少女の顔。音もなく降り注ぐ桜に、彼女は興味がないようだ。頬にあたる桜の花びらに鬱陶しそうに目を細める。少女は視線を前へと戻し、そのまま紺色のボレロとスカートの裾を翻らせながら歩き続ける。

よくよく見れば、彼女の着ているその服はまだ真新しいことに気付くだろう。サイズも彼女より少しばかり大きいようだ。そしてその服が示唆するもの。つまり、この辺りでは知らぬ者のいない女学院の制服。真新しいことと少し大きめのサイズから、彼女はおそらく新入生だろう。

少女は歩き続ける。ただ前方を睨みつけながら。

頭上には満開の桜と澄み切った青空。足下には緩やかにカーブしながら続く石畳の並木道。誰もいないその場所に、少女の革靴が石畳を叩く音が規則的に響く。

何処か遠くから、鐘の音が聞こえてきた。その音に彼女は聞こえ

てくる方向を一瞥する。だがそれだけだ。あいかわらず彼女は足早に歩き続ける。彼女が何処に向かっているのかは誰も知らない。そして何処から来たかも。

急に彼女はペースを落とした。前方を忌々しそうに眺め、俯き、溜息をつく。並木道は彼女の足下から徐々に上り坂になっていた。俯いたまま彼女はゆっくりと坂を上っていく。

突然ごう、と風が吹いた。突風に吹かれ木々がざわ、とざわめいた。

その風に少女は短い小さな叫び声を上げ、顔を両腕で覆った。

強風はほんの一瞬だけのことだった。少女が恐る恐る顔を上げれば周囲はすでに元に戻っている。何の物音もしない。頭上には満開の桜。ただ、空中にはさっきよりも多い量の花びらが舞っていた。それらもゆっくりと地面へと落ち着き、突風の痕跡は何もなくなる。少女は安堵の溜息をつき、再び歩き出そうと足を前に出した。

だが彼女は周囲を否定するかのような目付きをしていても、ただの無垢な少女に過ぎなかった。だから彼女は気付かなかった。

突風の後の周囲は、先ほどまでとは異なることに。

だから少女は歩き出そうと片足を前に出したその姿勢のまま再び立ち止まった。

少女の視線の先、舞い落ちる桜の中にもう一人の少女がいた。

同じようにショートカットで、大きめのサイズの紺色のボレロとスカートを着た少女。彼女よりもまだ小柄で、幼さが残っている。

ゆるい上り坂の上、桜に囲まれた小さな円形広場。その中央にまっすぐに立ち、少女はただ舞い散る桜を眺めていた。

その姿は絵画のようで、映画のワンシーンのようで、静寂で純粋であり、穢れのない神聖なもののようだった。彼女には、その少女が天使に思えた。

地上に降りてきた無垢な天使は天界では見られない蒼い空と見事な桜のコントラストに心奪われたのだろうか。ただ静かに頭上の風景に注視している。

しばしの間が空き、天使は何の前置きもなく乱入者の方に向き直った。小首を微かに傾げ、無邪気に微笑みながら慈愛に満ちた眼差しを少女に投げかける。少女はその眼差しに自分の心の奥底までが見透かされたような気がした。いや、「気がした」なんてものではない。天使は自分の心の闇さえも見通しながらも、その優しい視線を向けているのだ。

それはただ非難されることよりも、指さされ陰口を囁かれるよりも、何よりも効果的だった。少女は身動き一つせず自分をただ見つめている天使から目をそらすことができなかった。身体が震えているのがわかる。この場から、その可憐な天使の眼差しから逃げ出したいのに動くこともできなかった。

天使は怯えて微かに震える少女ににこりと微笑む。

それがきっかけだった。

少女はやっとのことで天使から視線をそらし、両目を固く閉じた。踵を返し、今やってきた道を全力で駆けだしていく。

早くこの場所から離れたいから。

あの少女から少しでも離れたいから。

あの視線から逃れたいから。

あの微笑みを向けられたくないから。

少女はただ舞い散る桜の中、広場から逃げ出した。

坂の上の小さな円形広場では小柄な少女が寂しそうに、

もう一人の少女が駆け去った下り坂をいつまでも眺めていた……

第一話　かく舞台は幕を開ける

□第一話　かく舞台は幕を開ける

校内は文化祭という独特の雰囲気と喧噪に包まれていた。非日常の空気がここにはある。

並木道の両側に並ぶ露店からの匂いや少女たちの声。遠くからはエレキギターやドラムの重低音が響いてくる。中庭の仮設ステージではバンドのライブがあっているらしい。そんな人々の波をかいくぐり、並木道の終着点、大きなホールへと足を急ぐ。焦りについさっきも目にした腕時計を確認する。まだ2分と過ぎていないものの、その針はもう時間が残っていないことを示している。こちらのことなんかお構いなしに進む秒針に自然と足と気持ちが急き立てられる。まるでルイス・キャロルの白ウサギのようだなと、そんなくだらないことが思い浮かんだ。あぁ、懐中時計が欲しいなと思うも、そんなものどこで売っているのか見当もつかない。それにやはり高いだろう。

季節は夏だった。まだ昼前の時間なのに日差しは容赦なく照りつけ、セミの鳴き声がうっとうしさを倍増させている。時季に似合わない長袖のシャツとジャケットが熱気と汗を捕らえて放してくれない。ようやく並木道の終わりに到達した。ホールの入り口へ続く広い階段を駆け上がるように上り、ドアに手をかけると、隙間からひいやりとした空気が首筋を撫でる。中は空調が効いていた。その冷気に思わず立ち止まる。どうぞ、と横合いから声をかけられた。そちらを向けば受付の生徒が文化祭のパンフレットを差し出していた。受け取れば間もなく始まりますよとの事だった。ありがとう、と彼女に会釈してエントランスからホールへの入り口に突き進む。

開演のブザーが鳴り響いた。

蔵森祐紀がホール内に入った時、ちょうど客席の照明が徐々に落ちていくところだった。ギリギリ間に合ったようだ。
暗くなっていく中を周りを気にしながら歩いていく。足下の非常灯だけでも自分には十二分だった。そう時間もかからず先に来ていた家族の姿を見つけてその隣、壁際の通路側に一つだけ空いている席に腰を下ろす。
「あら、祐紀。遅かったじゃない。心配したのよ」
「ごめん優香さん。これでも急いできたけど……市役所の職員が慣れてなくて」
隣の席に座る母親の優香の非難混じりの声に首を竦めて言い訳を話す。ほんのわずか見える気がする彼女の輪郭はおかしそうに笑っているようだった。
「お、来たのか祐紀。ギリギリじゃないか」
父親の言葉が終わらないうちに劇が始まった。ナレーションの声が響く暗闇の中ただ頷く。ふふふ、と含み笑いが聞こえた。
「悠佳が役者だなんて、楽しみだわ」
隣で優香が囁いた。まったくだと祐紀は声には出さずに同意する。普段から表情がわかりにくく、お世辞にも積極的とは言えない妹が文化祭の劇で役者をするなんて、一体どういう風の吹き回しだろうか。彼女はその点に関しては頑なに話すことを拒み続けており、家族の中ではそれがさらに期待を煽っていた。舞台上を照明が照らす。くすりと笑みを浮かべて、祐紀は始まった劇に先ほどまでの熱気と汗を忘れた。

劇の最中に祐紀はふと、前方に違和感を感じた。ちょうど暗転中のことだった。ほんのわずかな光を捉えようと眼を細める。
彼の注意を惹いたのは舞台上ではなく、ほんの2列ほど前の客席だった。祐紀と同じく端に座っていた人物が、新月の夜に近い暗闇の中を立ち上がったのだ。トイレか何かか？　いや違う。その人物

は立ち上がって側の壁により掛かり、そこから動こうとはしなかった。祐紀はその人物が気になってさらに目をこらすも、流石にこの暗さではおぼろげな輪郭しか見えない。やれやれとため息をつき、隣の優香にちょっと席を外す旨を伝える。

「どうしたのよ？　そろそろ悠佳出てくるんじゃない？」

怪訝そうに言う親に大丈夫、その前には戻ると言って祐紀も席を立った。件の人物と同じように壁にもたれかかる。

再び照明が灯り、劇が再開される。夜のシーンなのだろう、舞台上は薄ぼんやりとした青い光に照らされていた。客席は満席に近く、壁際は立ち見の客も少なくなかったから二人の存在は誰も気にとめない。

舞台上で進んでいく劇を見守りながら、祐紀は件の人物を観察した。服装、髪型からまだ若い男。祐紀と同じぐらいだろうから高校生だろうか？　自分と同じように妹でもいるのか、恋人だろうか？

それとも――

気配を殺してゆっくりと近づきながら祐紀はジャケットを撫でて、もしもの時のために”それ”が内側にあることを確かめて気分を落ち着かせる。ホールに流れるＢＧＭと大勢の観客の気配に混ざり、男は近づく祐紀に気付かない。はずだった。

「君が噂に聞く”灰色の死神”か」

何の前ぶりもなく、男は振り返りそう祐紀に囁いた。どういう風に接触すればいいのかで悩んでいた祐紀には藪から棒で、一瞬何が起こったのかわからなかった。十六夜の頼りない光に彼の両眼が知的に輝く。その双眸は祐紀のそれを捕らえて内側まで見透かされているかのようだ。思わず圧倒された祐紀は無意識に半歩下がったことにも気付かなかった。

「おっと悪い悪い。俺はカワミネ、狩野市管轄の捜査課にいる」

そう祐紀にだけ聞こえる声で言いながら、相手はポケットのパスケースから一枚のカードを取り出した。祐紀は反射的にその堅いプラスチックでできたカードを受け取る。

『銃士隊　狩野方面区　狩野市管轄　司法捜査部　捜査一課　理事官』
「川峰梗二」と書かれた下に長ったらしい彼の肩書きが書かれていた。カードの右側には、鋭い容姿の青年の顔写真がプリントされている。そこに写っているのは間違いなく目の前の青年だが、その目には先ほど感じたあの光はなかった。
「……へぇ、すごいな。佐官クラスか」
カードを一通り眺め、彼に返しながら祐紀は純粋な感想を述べた。捜査課の理事官なんていわばトップクラスの人間だ。ましてや狩野市管轄とくれば、狩野県の筆頭管轄だ。
「まぁ一応な。たいしたことはしてないが……君は下士官だったっけ？」
「あぁ、特務課、作戦指揮官補佐のそのまた補佐」
祐紀の言葉に、大変だなと言いながら彼――梗二はただ首をすくめた。
「……それで、何をやってるんだ？」
しばしの間を開けて、祐紀はようやく本題をぶつけてみた。梗二はそれに何か重大なことを思い出したらしく、舞台上に向き直り鋭い視線を送る。その動作に祐紀は眉をひそめた。どうしたと短く問うと、睨みつけたまま彼は舞台上を指さす。
「あの舞台上にいる子」
「……メイド服の子？　悠佳がどうした？」
そう言って気付いた。舞台上にいたのは妹の悠佳だった。たぶん、いや確実に後でさんざん言われることだろう。だが梗二はゆっくりと首を振った。
「もう一人の子」
「うん、あの子がどうした？」
「……何かがおかしい」
そう梗二は呟くと素早い動作で壁際を舞台目指して進んでいく。一瞬あっけにとられた祐紀も遅れて彼を追いかけた。

「おい、待て！」
梗二に向かって制止の声をかけるが、彼はすでに早歩きから全力疾走に移っていた。反射的に祐紀も駆け出す。近くの席に座る観客たち、制服を着た少女たちは壁際を走る二人に気付いて訝しげな視線を送りざわめいたが、梗二が舞台へと上がる階段に足をかけると同時に響いた金属音に注意を奪われた。その通る音に、二人に気付いていない観客たちもそのことに気付き息を呑んだ。

祐紀もようやく梗二が全力で走る理由を理解した。
舞台の上から何か黒い塊が落ちたのだ。上に吊されている照明だった。それが突然吊されているはずのバトンから外れ、落下し、落下防止用の細いワイヤーにかろうじて食い止められた。
舞台上に立つ二人の少女たちもその音に頭上を見上げる。そして突然の出来事に思考は停止し身体は硬直した。
だが、ワイヤーが落下を食い止めたのは時間にしてほんのコンマ数秒程度。ワイヤーがピンと張り、フレネルの全重量と加速度を受けた直後、ワイヤーはその張力に耐えきれずに切断された。フレネルは再び落下していく。重力に引かれて。ゆっくりと、スローモーションのように。そしてその真下には硬直したままの一人の少女。つい先ほど梗二が指さした少女。照明が落ちるのと梗二が彼女に飛びつくのはほぼ同時だった。

フレネルライトが舞台上に落下するまではほんの一瞬のことで、観客たちが叫び声を上げる間もなく重量物が床に落ちる低音、硝子の割れる甲高い破裂音、灯体が壊れていく軋む金属音の混ざった大音量がホール内に響き渡った。
客席から起きる悲鳴を聞きながら祐紀はフレネルの残骸、そしてその横に倒れている少女と梗二に近づく。直撃したのかと焦ったが、当たったのは少女だけのようだ。彼女の頭からは少なくない量の鮮血が流れ、舞台の上に広がっていた。梗二はそんな彼女を抱きかか

えるように仰向けに倒れたまま、周囲を鋭く見渡していた。
「大丈夫か？」
倒れたまま動かない少女の傍らに跪きながら梗二に声をかける。
「……何か感じないか？」
梗二は頭上、照明が吊ってあったあたりを睨め付けながらゆっくりと訊ねた。
「は？　何のことだ？」
少女のケガを調べながら祐紀は答える。半ば生返事だった。どうやら少女も直撃ではなく擦っただけのようだ。額と腕にちょっとした傷があるだけで命に別状はなさそうだ。むしろ倒れたときに頭を打っているようで、そちらが心配だ。祐紀が額の傷に触れると少女はかすかに苦しそうな呻き声を上げた。
「何かあるぞ。最後の最後に曲がりやがった」
「え？　何だって？」
ハンカチで傷口を押さえていた祐紀が顔を上げると、梗二が立ち上がったところだった。
「すまん、今なんて――」
「お兄ちゃん！　大丈夫！？」
祐紀の言葉は幼い叫びにかき消された。舞台の袖からクラスメートらしい少女たちが駆け寄ってくる。その先頭にいた小柄な女の子は目に涙を浮かべながら梗二に飛びついた。袖の奥からは「緞帳を下ろせ」という声が聞こえる。
「うわっ！　紗月、よせ」
ショートカットの少女に抱きつかれた梗二はよろめいて、そして慌てて彼女を引き離した。
「メディック！　この中にメディックかＳＡＲはいないのか？」
集まった少女たちに梗二は訊ねる。集まった女の子たちは互いに顔を見合わせるばかりで誰も答えなかった。それはそうだろうと祐紀は思う。彼女たちは何も知らない。だから梗二が尋ねた意味すらわからない。何故なら、

「訊くだけ無駄ですよ。ここには”銃士隊”はいませんから」
その声は梗二たちの背後からだった。一同がそちらに振り向くと、ちょうど舞台に飛び上がってきた少女が、今まさに降りようとする緞帳を潜って側にやってきた。彼女の背後で緞帳が降りきる。客席と舞台が区切られ、客席の喧噪がより遠くになった。
「銃士隊の方でしょう？　生徒会風紀委員会の深谷です」
白のブラウスに紺色の独特なデザインのジャンパースカート。女学院の制服を纏った彼女は祐紀と梗二の2人にそう告げた。事情を呑み込めていないらしい梗二がしどろもどろに頷く。
「あぁ、狩野市管轄の川峰だけど……銃士隊がいないってどういうことだ？」
「そのままの意味です。最初から参加してないんですよウチの学校。珍しいでしょ？　代わりと言っては何ですが、そのための生徒会風紀委員会です」
梗二が深谷霧と話している間に祐紀はフレネルの残骸に近づき調べていく。と、すぐにそれに気付いた。
「なぁ、この子のケガは大したことないようだけど、頭打ってるみたいだから病院に搬送した方がいいと思う。それと、ちょっとこれ見てくれないか？」
「ん？　どうした、何かあったか？」
側にやってきた梗二に祐紀は頷く。
「あぁ……ところで照明がどうやって吊されているか知ってるか？」
いや知らないな、と梗二。
「ま、俺もそんなに詳しくないんだけど、上見てみろよ」
そう言いながら祐紀は頭上を指さす。
「バトンって言ってな、長いパイプがワイヤーで吊られているんだ。わかるか？」
「なるほど、それに照明が吊されてるわけか？」
理解が早くて助かると祐紀は思った。舞台上から見上げれば他の照明で逆光になって頭上は見えづらい。

「で、そのバトンにハンガーって器具で取り付けられているんだ。こんな風に」
説明を続けながら祐紀は右手の人差し指を緩く曲げてフックのようにしてみせる。
「ま、そいつを見てもらえばすぐわかると思うが……」
そう言いながら足下の残骸に視線を移す。梗二も同じように残骸に視線を移し、そして彼もすぐに気がついた。
「……そのハンガーって部品はどれだ？　もしかしてここにないとおかしいんじゃないのか？」
祐紀は梗二の理解力の高さ、その頭の良さに舌を巻いた。
「その通り……ハンガーはこの頭上に残ってるみたいだ。ハンガーと照明は自然に外れるようにはできていないらしい。ま、そのあたりは実際現物を見てみるとして。それとこれを見てくれ」
そう言って祐紀は残骸から伸びる細いワイヤーを手に取った。結局役に立たなかった落下防止用のワイヤーだ。
「これ、落下防止用のワイヤーなんだ。ハンガーとは別にバトンに巻いて万が一の時の落下を防ぐんだが……」
「……切れたよな、普通に。意味無いじゃないか」
梗二の呆れたかのような声に祐紀はにやりと笑いながらまぁまぁと宥める。
「ここ、切れた部分を見てくれ」
ワイヤーは細い金属ワイヤーを束ねて太くしたもので、その切断箇所は綺麗に切られていた。端の方が一束、ほつれたようになっており、何本か飛び出ている。
「……まさか」
梗二は驚きの声を上げた。
「本当に重さに耐えれずに切れたのなら、こんなに綺麗になっているはずがない。この端みたいにバラバラになっているはずだ」
「切れるように前もって半分以上切られていた？」
「おそらく」

祐紀の肯定に、梗二は難しい顔をしてしばらく黙り込んだ。
「事故じゃないのか？　しかもなんでこんな手の込んだことを……」
「ややこしことに巻き込まれたな」
梗二の独り言のような呟きに同意しながら、祐紀は梗二に尋ねたかったことを思い出した。
「そう言えば、何であんたはこのことがわかったんだ？　事前に知っていたとしか思えないんだが……」
それはつまり、梗二を疑っているということだ。落下するまで特に異常は見られなかった。なのに何故、彼はあのように異常を知って飛び出せたのか。
「え？　あぁ、それは――」
「何だね君たちは！　離れなさい！」
突然の怒鳴り声に梗二は口をつぐみ、声のした舞台袖に向き直った。そちらからは生徒たちを押しのけるように数人の大人たちがこちらにやってきていた。おそらくこの学校の教師たちだろう。先頭を進む体格の良い男性教師は梗二と祐紀を忌々しそうに見ている。さらにややこしくなりそうだと祐紀は梗二の顔を見た。彼もこちらを見ており、目線が合うと彼は面倒そうに首をすくめた。
「”近衛銃士隊”の蔵森だ。”灰色の死神”と言ったほうがいいか？」
「同じく捜査課理事官の川峰だ」
二人して簡潔に「誰だよオッサン」という雰囲気を込めて教師たちに告げる。”灰色の死神”、”捜査課理事官”という単語に彼らは表情を変えた。後ろのほうでは何かを小声で囁き合っている。先頭の男はそんな後ろの連れたちをじろりと睨み、彼らは一様に押し黙った。
「ここは部外者の立ち入りは禁止だ。帰りなさい」
言葉こそ丁寧だが、有無を言わさない威圧感を持って男は言い放った。生徒指導担当や体育教師にありがちな高圧的な態度。だがそんなことで怯むような二人ではなかった。

「そう言われて素直に帰れるものか。後一歩でこっちも危なかったんだ」
「それに何だか犯罪のニオイがするぜ。それとも何だ？　俺たちがいると困るのか？」
祐紀が楽しそうに言えば、男は青筋を立てて顔をしかめた。
「……何を言うかと思えば。これは事故だ。この学院は銃士隊に参加しないし、銃士隊が校内の問題に介入するのも認めない。君たちのような子どもに事故現場を荒らされても困るのだよ。さぁ出て行きなさい」
「なんだと……ぐっ」
祐紀が男に一歩詰め寄ろうとすると誰かに襟元を思い切り掴まれた。息が詰まって咳き込む。誰だと思えば掴んでいたのは梗二だった。
「よせ。向こうだって筋は通っている。俺たちだって管轄違いだ。ここは一旦引いた方がいい」
梗二は祐紀の襟元を放さないまま耳元で囁く。
「それに……紗月の前でそんな物騒なモノ取り出すな」
頭に血が上っているところにさらに神経を逆撫でるようなことを言われて、祐紀は一瞬頭が真っ白になったが、すぐにそれも収まった。そもそも何故彼は祐紀がジャケットの下に吊していることがわかったのか、素直に疑問に思ったからだ。
「ちっ、まぁ仕方ないか」
梗二の手を振り払い、男に向かって舌打ちすると、祐紀は踵を返して反対側の舞台袖へと歩き出す。梗二がそんな彼を止めようとしたが、毅然とした表情で男たちの前に立ちはだかった。
「……我々の目的は”すべての教育機関、及び児童福祉施設の安全の確保と秩序の維持”だ。そのため政府から司法捜査権も超法規的措置の実施の許可も受けている。公務執行妨害に銃士隊侮辱、そっちの対応次第では実働部隊でここを制圧することもできるからな」
最後にそう言い残し梗二も祐紀の後を追う。黙ったまま動かない

教師たちに向かって軽く頭を下げてから深谷霧が続いた。

／／／／／／／／／／

舞台袖へと入った祐紀は、そのまま舞台裏にある重い鉄製の扉を開けて外へと出た。一気に熱気と湿気がまとわりつく。人でごった返していそうな表から出る気はさらさら無い。外へ出てみれば彼の予想通り人気のないテラスだ。眼前には暗い木立。学院の敷地内にこんな暗い場所があったなんて……ここの生徒でもここまで来る者は皆無だろう。存在自体知らない者も多いのではないだろうか。人工的に植林されたのであろうが、長年手入れされていないのだろう。木々は四方に枝を伸ばし、根本は丈の高い植物が生い茂っている。雑木林に近い、と言うよりも原生林だとか密林という表現がピッタリな気がする。明らかにここだけ場所が違う。そのことに祐紀は違和感を感じた。思わず彼は周囲を見渡す。

ここは本当に学院の裏手か？

いくら山の麓とはいえ、まだまだ住宅地の中のはずだ。

と、その時祐紀の視界が何か白い物を捉えた。暗い林の中、木々の間に。

人影だ。その目を惹く白はワンピースだろうか。少女？　突然のことに祐紀の思考が追いつかない。この不気味ささえ持つ木立と白い服を着た少女が結びつかない。

その少女の影は立ち止まり、彼の方を振り返った気がした。思わず瞬きする間に少女の影は身を翻し、木々の中に姿を消した。祐紀がいくら目をこらしても、もう林の中に人の気配はなかった。

「……何だ？」

見間違いか？　しかしこの暗い中であの白さは際立っていた。見

間違いではない。立て続けの出来事に思考の整理が追いつかない。だが迷いは少しの間のことで、とりあえず、この木立の中に消えた人影を追うことにしよう。祐紀はテラスの手摺りを飛び越え、湿った地面に着地した。ジャケットを上から撫でて”それ”があるのを確かめることで気分を落ち着ける。長いため息をつき、その暗く、どことなく不気味な森へと踏み出した。

「行かないほうがいいよ。たとえ君が”灰色の死神”だとしても」

凛と通る少女の声。祐紀が振り返ればホールの外壁にもたれかかるように、少女が微笑んでいた。

第一話　かく舞台は幕を開ける（後書き）

ようやく本編の始まりです。
元々が高校時代に書いた作品なので、今改めて読むと拙さ全開で恥ずかしいですが、ちょこちょこ修正というか半ば書き直しての連載が続きます。

今後もしかしたら大幅な改訂を加えるかもしれません…

Ｃａｐｒｉｃｃｉｏ　天使と隣人と私の名前

□Ｃａｐｒｉｃｃｉｏ　天使と隣人と私の名前

「ねぇねぇ、英語の予習やってきた？」

朝、まだＨＲまで１０分程度ある時間だった。いつものように私は教室に入り自分の席に座ったまま、何をすることもなくぼんやりと時間が過ぎるのを待っていた。何事も起きないことを願いながら。その儚い願いは大まかに言えば達成されていた。そして今日もこのまま過ぎ去ることを祈る。

この学院に入学して数日がたっていた。昨日から授業が始まっていたが、どうせ最初の授業なんてオリエンテーション程度のものなので、昨日今日と立て続けにある英語から実際の授業が始まる。

クラスの雰囲気は、そう悪いものではなかった。見知った顔は一つもない。それは私にとって最高の環境だと言えた。わざわざレベルを上げて受験しただけのことはあったのだ。クラスメイト達はまだお互い慣れないからか、気安く他人に話しかけたりもしない。だからこそ今日までのところは誰にも干渉されずにいることができた。つまりそれは、平穏であること。

……いや、話しかけてきた人間を一方的に無視したのは私自身だが。

その小さな鈴が鳴るような可愛らしい声は、私の隣の席に音もなく座った生徒のものだった。

おかしい。その席の主はこんな声ではなかったはずだし、この学院には似合わないような、あえて言うならばもっとがさつな言動の持ち主だ。それに彼女ならいくつか部活に顔を出してみると、この時間は校内を歩き回っているはずだ。先日そういう話をしていたの

を何ともなしに聞いた。今日も私が来たときには机の横に鞄があったものの彼女の姿はなかった。
「えと……起きてる、よね？　クラモリハルカさん？」
どうやら私に話しかけていたらしい。そろそろクラス全体が私が誰とも話したがらないことに気付き始めているだろうに。だから、この物珍しい女の子の顔を一目見てやろうと冷たい笑みを貼り付けて顔を上げた私は、隣の席に座る少女の顔を見て絶句した。

――な、なんでここに彼女が！？

思わず席から立ち上がり、彼女から距離をとろうとする。椅子を引き摺る耳障りな音に、クラス中の視線が集まってくるのが感じられた。その視線に心臓が跳ねる。できるだけ目立ちたくはないのに！
「ふにゃ、ごめん。びっくりさせちゃった？」
なんのことはない。入学式の日に、誰もいない桜並木で出逢った少女だった。よくよく思い出してみればあの時彼女はこの学院の制服を着ていたし、この小柄な少女は年上には見えない。同じ学年と考えるのが妥当ではあるが、どうしてか私は彼女が現実に存在していることに驚くと共に、どこか安堵していた。
彼女が私に向けるのはあの日と同じ微笑み。
私の脳裏にあの時の出来事が溢れてくる。あぁ、そんな眼で見ないで。どうしてそんな見透かすような眼で見るの？　どうしてそんなにやさしく微笑むことができるの？　私が誰だか知ってるの？
そうよ。クラス中みんな私を見ている。私が誰だか知ってるから。私が呪われた魔女だと知っているから。この場所――マリア様に祝福された学院に相応しくない存在だから。

――だから。

だから、私は眩暈に薄暗くなる視界の中を、手探りで教室から逃

げ出したのだった。

／／／／／／／／／／

私の名前は蔵森悠佳。このミッション系学院の1年生。人呼んで”呪われた魔女”。誰がそんなことを言い出したのかは知らない。興味もない。中学の時のクラスメイトと言うことだけは知っている。何故そう呼ばれるのかは何となく知っている。でも、と思う。”呪われた魔女”とは語感はいいが、まったくもって適当な、そして本質を表しきれていないネーミングだと。しかし不名誉なそして私という少女を嘲るのには十分な呼び名でもある。

　私は中学の3年間を”呪われた魔女”として過ごし、低俗で暇を持て余しているかのようなクラスメイト達を尻目に勉強してめでたくこの学院に合格した。もう恥も外聞も捨てて言ってしまえば、いじめから逃げるためにこの学院にただ一人合格して進学したのだ。だからここには、同じ中学出身の人間などいない。私だけ合格できたというのは少々眉唾物だし、だからといって真偽を確かめるほどの情報収集能力、特に人脈は私には皆無だった。でも少なくともあの中学から進学したのは私だけというのは本当らしい。クラスだけでなく、同じ学年にも見知った顔はいないようだった。

　誰も知る人がいない環境だと知った時、私は正直に嬉しかった。今までの呪縛から逃げ出すことに成功した気がした。自由になれた気がした。だがそれはそのような気がしただけだと言うことに私が気付くのにそう時間はかからなかった。

　中学の3年間を耐えてようやく解放された私は、すでに”呪われた魔女”だったのだ。見た目通りの、パーソナルな情報から見える一人の少女という偶像は最早存在しなかったのだ。入学式の日知らない顔しかいない教室に入った瞬間、それを理解した。私はここで

は異質な存在なのだ。マリア様に見守られたこの学院において、異端な存在なのだ。

ふぅ、とため息をついた。

ここは何処だろうかと見渡す。無我夢中で教室から飛び出したから今いる場所の見当がつかなかったからだ。少し頭の芯が重い感じがするが、眩暈はだいぶよくなっていた。ポケットから時計を取り出す。蓋を開けて文字盤を確認するまでもなく、予鈴が鳴り響いた。ＨＲ５分前だ。そろそろ教室に戻ったほうがいいだろうか。でもあんな飛び出し方をしたから、何となく教室に戻りにくい。

「……なーにやってるんだいそんなところで、君」

突然の声に反射的に緊張した。振り返れば、廊下と渡り廊下の分かれ道にショートカットの少女が立っていた。いや少女という表現は正しいだろうか。同じ年齢なのだから、まだ少女という表現は大丈夫だろうが、その長身、引き締まった体躯、男の子のような短い髪の毛、制服のボレロとジャンパースカートでなければ、例えば細身のジーンズだったら、間違いなく青年に間違えられるだろう。そう言う少女だ。

「珍しいじゃないか、君がこんなところにいるなんて……部活でも探しているのかい？」

毎日見ている少女――隣の席の本当の主を睨め付けながら、私は首を軽く振った。

「違うわ。違うに決まっているでしょう？　そんなこともわからないのかしら……ええと」

驚かされた仕返しとばかりに嫌味を言おうとして、そこで詰まってしまった。他人を拒否すると言うこと、他人の情報をシャットアウトすることは、こういう時に墓穴を掘る結果になる。そのことを察したのだろう、彼女は一瞬ニヤリと笑った後、呆れているのか悲しんでいるのかよくわからない表情をした。

「また忘れたのかい……日高理奈だよ、悠佳くん」

「……別に名前を忘れたわけではないわ」
「そうだろうね。だって君、覚えないじゃないか」
またニヤリと笑って彼女は教室に戻るかと続けた。背を向けて歩き出す。ＨＲをサボタージュするわけにもいかないから、私も仕方なくその後を追う。長い彼女のすらりとした足取りは速い。
「……憂鬱だわ」
対して、教室に戻る気になれない私の足取りは重い。その呟きが聞こえたのか、彼女は立ち止まり振り返った。そのまま何も言わずに私が追いつくのを待っててくれる。余計なお世話だ。
「そうだ、僕はね演劇部に入ろうと思うんだが」
私が追いつくと再び背を向けて歩き出した。だが今度はゆっくりとだ。私のスピードに合わせている気らしい。余計なお世話だ。だが彼女の話に私は眉をひそめて顔を上げた。
「演劇部？　バスケ部はどうしたのよ」
彼女は活動的な人間だ。そしてその長身。毎朝と放課後の日課である部活動巡りは運動部ばかりだったはずだ。そしてその身長からバスケ部から熱烈なオファーが来ていると先日小耳に挟んだ。
「うん。高校も運動部にしようかと思ったんだけどね、文化部もいいかなと思ったんだ。昨日から文化部棟をまわってるんだよ」
だからさっき渡り廊下から姿を現したのか。渡り廊下は文化部の部室棟に繋がっている。でも文化部は朝練はないんだねと独り言のように付け加えた。運動部じゃあるまいしと思ったが何も言わないでおく。
「うん。実を言うとね、僕はほら、こういうキャラだろう？　スポーツ少女に見えるだろうが、実は文化系なんだぜ」
「意外ね」
率直に告げれば、彼女はくくくと笑った。
「意外だろう？　クラスメイトでも知ってるのは君だけだよ悠佳くん」
「何よそれ？」

「このことを話したのは君が最初だと言うことだよ」
なんだそれは。別に話してと頼んだつもりはないのだけれど。本当に余計なお世話だ。
「そこでなんだが、悠佳くん」
「何よ？」
「僕と一緒に演劇部に入らないかい？」
意味がわからない。
「そのままの意味だよ。部活入る気ないんだろう？　勿体ないと思うな」
本当に余計なお世話だ。私は無視して教室のドアに手をかけた。彼女と話をしているうちにいつの間にか私たちの教室まで戻ってきていた。辺りを見渡せばＨＲ前ということで自分の教室へと向かう少女達が廊下を行き交っている。ドアを少し開けたところで、私は教室から飛び出した理由を思い出した。急に背筋が寒くなり、少し開いたドアの隙間からそっと教室内を伺う。私の席も、その隣の彼女の席も、誰も座っていなかった。ただ本来の持ち主が帰ってくるのをただ待っていた。ゆっくりとそのまま教室内を見渡していく。
「……何やってるんだよ」
いた。私の席の隣の列、教室の一番後ろ。そこに少女が座っていた。周りの席のクラスメイトとおしゃべりしているらしく、楽しそうに笑っている。入学式のあの日、満開の桜の下で出会い、そしてつい先ほど私に話しかけてきた天使がそこにいた。本当に実在している。天使だと思ったが、やはり普通の少女なのだろうか。
「どうしたんだ？　あぁ、サツキ嬢か？　君たちどういう関係なんだ？」
私と同じように隙間から教室内を覗き込み、私の視線が何処に向かっているのかわかったのだろう。
「サツキ？」
だがその名前には聞き覚えがない。
「あの人、あのボブカットの……今後ろ向いた人」

「うん、だからサツキ嬢がどうしたんだ？」
「サツキ？　それが名前なの？」
私たちの背後に別のクラスメイトが来て訝しそうに見ていたので廊下の反対側に移動する。彼女は何がおかしいのかぷっと吹き出した。睨みつける。だが彼女は笑いながら本当に他人に興味がないんだな、と言ってのけた。返す言葉もないので黙っておく。
「川峰紗月。出席番号だと君の三つ前だぞ？」
カワミネ。それなら同じカ行で、確かに出席番号が近い。一体何故今まで気がつかなかったのだろう。自分の他人への関心のなさが今更ながら恨めしい。
「知り合いじゃないのか？」
「なんですって？」
思わぬ勢いに彼女は少したじろいだようだ。何事か考えているかのように視線を彷徨わせた。
「いや、紗月嬢がたまに君のことを見ているからね。てっきり同じ中学とかかなと思ったんだよ」
「私を見てる？」
「知り合いじゃないのか。まぁなんか距離がある雰囲気だからな……っと、先生来たぞ」
ちらりと廊下の遠くを見やり、彼女は慌てて教室へと入っていった。私もその後に続く。

川峰紗月。それがあの少女の名前なのか。
私はその名前を繰り返し心の中で呟いた。久しぶりに覚えた、他人の名前だった――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3478r/

その暗い満月の下、舞い散る桜の中

2011年8月13日03時11分発行